とある恋物語

方舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある恋物語

【Ｎコード】
Ｎ３４１１Ｚ

【作者名】
方舟

【あらすじ】
郁須大学附属高校に通う繭には、密かな楽しみがある。……それは、大学の図書館にある閉架書庫の入庫カウンターでバイトをしている、ある大学院生の所作を眺める事。
自分がどうしてこの人を眺めたいのか分からない。けれど、ある日偶然書庫に入る事が出来た繭は、カウンターに戻ってきた彼と鉢合わせてしまう……。

……わたしには、密かな楽しみがある。

私立郁須大学附属図書館。基本的に他校や一般人に開かれていないその扉も、隣の敷地にある附属高校に通うわたしなら、学生証を見せるだけであっさりと開く。

わたしの密かな楽しみは、そんな郁須大学附属図書館、その地下にある閉架書庫…の、カウンターに座っている、ある大学院生を見ることだ。

顔は知ってるし、苗字も知ってる。といってもわたしは、彼の下の名前も、今何年生なのかも知らない。多分彼も、わたしがここで彼を眺めてる事なんて知らないと思う。……わたし自身、どうして彼を眺めてるのか、理由がよくわからないのだ。

ともかく、わたしは彼を眺めるのが好きで、閉架書庫のカウンター近くに席を取り、彼が席を立ってシフトを交代するまで、お気に入りの恋愛小説を読むふりをしながら、黒ぶちの眼鏡をかけた彼が分厚くて難しそうな本を読んだり、閉架書庫へ入る教員や学生と話をしているのを、何となく眺めるのが日課になっていた。

それがわたしの日課で、密かな楽しみ。

名前も、どんな人かもあまり知らないその人を、何とは無しにただ眺めるという、全然華やかじゃない日常を、わたしはそれなりに楽しんでいたのだ。

……でも、今日に限っては違う。

歴史の先生に出された宿題がどうしてもわからなくて、図書館で調べ物をしようと思ったのだ。なのに、どういうわけだかわたしは、いつも通り大学附属図書館に来て、閉架書庫の受付カウンターの傍にある閲覧席に座り…そして、カウンターにいる人が彼ではない事に気がついて、それで我に返ったのだった。

……何やってるの、わたし。遊んでる暇ないじゃない。

頭を抱えかけて、ふと思いつく。そうだ、ここは図書館だ。本の数でいったら、それこそ高校の図書館より断然多いはず。

わたしは開き直ることにした。どうせ彼がいないなら、彼がいつも守っている扉の向こうを覗いてやろう、という気になったのだ。わたしは立ち上がり、いつも眺めているカウンターへ向かった。

「あのう……附属の生徒って、この書庫に入れるんですか……？」

あまり目立つのが好きじゃないわたしにしては、こんなふうに知らない人に話し掛けるなんて、普段なら物凄く勇気がいる。でもこの時のわたしはいつも通りじゃなかったし、何より開き直っていた。

でも、顔を上げた係の人は、わたしの制服を見て、露骨に「高校生が閉架に入るのか？」という顔をする。それだけで、冷静になったわたしの勢いは完全に削がれた。

「……あ、ダメ、ですよね、やっぱり……」

すみません、と呟き踵を返そうとするわたしに、係の人は慌てたらしい。待って待って、と呼び止めてきた。

「附属の子が来るなんて初めてだから。えっと……そうそう。貸出はできないけど、この図書館の中でなら自由に閲覧できるよ。」

ここに出席番号と名前書いて、荷物はそこのロッカーね、ハイ鍵、などと矢継ぎ早に言われて、流されるままに手続きを済ませる。

……何だかわたし、とんでもない事しちゃったかも？　と今更になって後悔してももう手遅れ。係の人に言われるままに、わたしはカウンターの向こう側へ連れていかれた。

ノートとペン、携帯とお財布以外の荷物を全部ロッカーに預けて、わたしは閉架書庫の扉の前に立たされる。

……なんだか、これからラスボスの潜むダンジョンに突入する、ひよっこ冒険者の気分だ……。

「読みたい本はカウンターに持ってきてくれれば処理するから。他にわからないことあったら、中の職員に聞いて。じゃ、ガンバってね！」

扉を開けた係の人に見送られて、わたしは一歩踏み出す。背後で扉が重い音を立ててしまったのに凄く不安を感じたけど、ここまで来たらもう、進むしかない。目の前の階段を下りて、書庫を目指した。すれ違う私服の大学生が、不思議そうに見つめて来る。わたしは彼と目を合わせないように、ひたすら下を向いて階段を下っていった。

唐突に、視界が開ける。

「わあ…本の森だ……」

周囲を見渡して、わたしは思わずそう呟いた。
わたしの背よりずっと高くて、ぎっしり本の詰まった本棚がずらり。それはまさに、「森」というのがぴったりの風景だ。鼻から息を吸い込むと、独特な古書の匂いがした。

「お祖父ちゃんの匂いだ……」

神田で古本屋さんをしているお祖父ちゃんから漂っていた匂い。懐かしい匂いに、わたしはちょっとほっとした。あの、カウンターにいつも座っている彼も、こんな匂いがするんだろうか……？

「……って、違う違う。違うの」

ちょっと考えてから我に返る。いけない、わたしは調べ物に来たのだ。別に彼のことが気になって来たわけじゃない。

……どんなに一生懸命言い訳をしようが、それが単なる言い訳でしかないということは、わたしが一番よくわかっている。でも、そうでもしないと何だか顔の温度が急上昇して大変なことになるのだ。

「さあ、調べ物、調べ物……！」

わざと声に出して目的を再確認すると、わたしは本の森の中に飛び込んでいった。

調べ物はあっという間に終わった。もともとレポートを書けとか、調べ学習で発表とか、そういうのではなかったので、一冊辞書みた

いなものを探し出しさえすれば、全然問題ない。

内容を見て、宿題の答えをノートに書きとめたら、後はこの書庫にあまり用はない。

けど、何となくすぐ出てしまうのももったいないような気がして、わたしはノートを抱えたまま、しばらく書庫の中を歩き回った。沢山の本と、本から感じる、如何にも「古いです！」って感じの気配。お祖父ちゃんの古本屋さんと同じ気配だ。

「……こんな所で勉強できるなんて……いいなぁ……」

正直、座り込んで黒板とノートをにらめっこする今の勉強、あんまり好きじゃない。言い訳にもならないけど、成績があまり上がらないのは、実はそのせいなんじゃないかと、わたしは個人的に思っている。

そんな事を考えながら歩きまわっていると、ふと目に飛び込んできた本。

「……これ……」

背表紙を見つめて、手を伸ばす。わたしの背より高い場所にあるその本は、少し背伸びしないと届かなかった。タイトルは『晩清の風俗―江南農村社会における舞台芸能を中心として―』。背表紙だけ見ても、もの凄く漢字が多い。でもそれ以上に、私はこの本に見覚えがあった。

「……これ、あの人がカウンターで読んでた本だ……」

抜き出して、表紙を見つめた。著者はKという人。長い間いろんな人の手に渡ったのだろう、真っ赤な布に金色のインクで書かれて

いたんだろうそのタイトルは完全にくすんでしまっていた。

「……どんな事が書いてあるんだろう……？」

そう思って中を覗き込もうとすると、突然携帯がぶうぶうとポケットの中で震えだす。慌てて取り出すと、ダイレクトメールが入って来ている所だった。もう、と呟いてすぐに消し、改めてディスプレイを覗き込む。

「……やばっ！」

思わず呟いて折りたたみ式の携帯を閉じた。もう7時を回っている！

名残惜しいけど仕方ない。わたしは腕の中にあるものを抱きしめ、書庫を出ようと歩きだした。走るのはダメだと思ったので、できるだけ早足で階段へ向かう。途中何度か道に迷いそうになりながらも、何とか階段までたどり着くと、そのまま早足で階段を上がった。

ようやく入口まで戻ってきて、両手にいろいろ抱えたまま、重い扉を開ける。カウンターの前まで小走りに行くと、わたしはぺこりと頭を下げた。

「あのっ、ありがとうございました！」

「はい、お疲れ様！　ここに今の時間書いて、ロッカーの鍵を返却して……あれ？」

言われて、顔を上げる。カウンターに座っていたのは、いつも眺

めているあの人だった。

「……えっ」

おもわず、思考が止まる。な、なんでここにこの人が……？

「その本、閲覧ですか？」

彼が指さす自分の胸元を見て、更に頭が真っ白になる。わたしの腕の中には、目の前にいるこの人が以前読んでいた、『晩清の風俗―江南農村社会における舞台芸能を中心として―』があった。

……持って……来ちゃった……？

「凄いな。勉強熱心だね」

言われて、今度は頬から火が出そうになる。……言えない。言えるわけない。「貴方が読んでるのを見て気になりました」だなんて……！

「す、すみません、間違えたんです！　あの、すぐに返してきますからっ……！」

言って書庫へ駆け戻ろうとすると、待った待った、と手で制された。

「大丈夫、それなら僕が戻しておくから。……にしても凄いな、君附属の子だろ？　やっぱり書庫に興味があったんだね」

ニッコリ笑うその人の顔が、まともに見られない。だって相手はずっと目で追っていた人で、そんな人に「やっぱり書庫に興味があ

ったんだ」なんて……！

「……あ、あれ」

……今彼、なんて？

……「『やっぱり』書庫に興味があったんだ」……って……言わなかった？

再び思考が凍りつく。えっと。つまり、それは。

黙ったままのわたしに、彼は怪訝そうに首をかしげ、重ねて問い掛けてきた……。

「あれ、勘違いかな……？　ここ最近、ずっとそこで本を読んでたよね？　その時このカウンターを眺めてたから……ひょっとして、この書庫に入ってみたいのかなって気になってたんだけど……」

違った？　と聞かれて、肩から力が抜ける。

わたしが眺めてたのは、書庫に通じるカウンターじゃなくて……！

「ち……！！」

……違います、と言い返そうとして、言葉が喉に詰まった。違う、と否定して、「じゃあ、どうしてこっちを見てたの？」と聞き返されたら……？　そうしたら、わたしはなんて答えたらいいんだろう……？

目の前の人は首を傾げたまま、じっとわたしが答えるのを待っていたけれど、ふとわたしの後ろを見遣って、突然立ち上がった。

「ちょっとすみません。……ごめんね、場所変えようか」

「……えっ」

振り返ってみれば、既にカウンターで手続きを待っている人がいる……！

「ご、ごめんなさい！」

わたしは慌ててその場をどいた。わたしと話していた彼に代わり、別の……わたしが書庫に入るときに対応してくれた人が手続きを始めたのを見て、彼はカウンターから離れる。あの赤い本をパソコンの前に持っていくと、手早く何かの作業を終え、わたしの方へ歩み寄ってきた。

「ハイ、ロッカーの鍵。図書館離れるから、荷物は出してきてね」

キャンパス内を、通学鞄を抱えて歩く。その隣で、作業用のエプロンを脱ぎ、代わりにファーのついたコートを羽織った彼が歩いている。3年後には歩くかもしれない暗いキャンパス内はしかし、まだまだ今のわたしには早すぎるみたいで、すれ違う人の目が怖い。

けれど、そんなわたしの気持ちを知ってか知らずか、隣を行く人は興味深そうに私を覗き込んできた。

「そういえば、まだ名前を聞いてなかったね」

「……え、えっと」

立ち止まって、口ごもる。どう答えたものやら困っていると、目の前に突然、白い紙が突き出された。

「僕、河瀬匠って言います」
「さ、笹野繭……です」

渡された名刺に釣られるようにして名乗ってしまい、はっと顔を上げる。なんだかいたずらがうまくいった時の男の子みたいな顔をして、その人……河瀬さんは笑っていた。

「了解、笹野さんね。立ち話もなんだし、そこ入ろうか」

そう言って彼が指差す先にはカフェテリア。学生生協で建物一つ使ってしまう、大きな郁須大学の、いくつもある学食の一つらしい。河瀬さんはわたしの返事を待たずに建物の中に入っていった。慌てて追い掛ける。周囲を見渡し、食券の自販機の前にファーつきのコート姿を見つけて、わたしは息をつきながらそちらへ向かった。

河瀬さんは千円札を自販機に入れながら、振り返らずに問い掛けてくる。

「コーヒー飲める？」
「あ、はい」
「そっか。じゃあマフィンは？」
「は、はい、大丈夫……」

よかった、じゃ僕も、と呟きながらボタンを押すと、千円札がチケット４枚に変わった。

「お待たせ。行こうか」

振り返り歩きだす。わたしは河瀬さんを追い掛けてカフェテリアの中へ入った。

店内は明るくて、まだお客さんがたくさんいる。河瀬さんは窓際

の隅の席に私を連れていくと、テーブルに、手に持ったままだったあの赤い本をおいて、カウンターへ向かった。食券を交換してくるのだろうか。

わたしは手にしたままだった名刺を、改めて見つめた。

「河瀬匠。郁須大学大学院文学研究科東洋史学専攻　修士課程……」

名刺なんて貰ったの、生まれて初めてだ。肩書が見事に全部漢字。そして名刺だから当然といえば当然だけど、住所、電話番号、携帯のアドレスと番号、そしてパソコンのアドレス。海外の人にも渡すのだろう、それぞれ英語でも書いてあった。

……これ、高校生なんかに渡していいのかな……？

なんだか、名刺って持っているだけで緊張してくる。わたしはじっとその白くて小さな紙を、食い入るように見つめていた。

「おまたせー……あれ、名刺おかしな所でもあった？」

「い、いえっ、なんでもない……です」

トレイを二つ分抱えて河瀬さんが戻ってくる。わたしは慌てて顔を上げ、それから名刺を扱いかねてテーブルに戻した。

河瀬さんは何事もなかったようにトレイを並べる。トレイの上には大きめのマフィンと紙コップ。コップの中はコーヒー、そしてミルクポーションとスティックシュガー。なぜか二つずつ。

河瀬さんは、マフィンを二つ手にとって、私に示してきた。

「バナナナッツとチョコチップ、どっちがいい？」

ふわりと香ったナッツとチョコレート。美味しそう、と感じながらも戸惑いを隠せない私は、どうすればいいのかと首をひねった。
……この場合、私は遠慮すべきなんだろうか、それとも……？

「好きな方選んで」

言われ、それじゃあ、と指をさす。

「バナナナッツで……」
「了解、はいバナナナッツ。じゃ僕チョコね」

言って向かいの席に着くと、河瀬さんはマフィンをフォークで切り取って口に運んだ。途端に、如何にも幸せ、というような表情になる。

「味覚が子供だってよく言われるんだよね。コーヒーも好きなんだけど……砂糖を入れないとどうにも飲めなくてさ」

苦笑する河瀬さんに何と言って答えたらいいか分からず、下を向く。どうぞ食べて、と勧められて、おずおずとフォークを手に取った。
一口切り取って、口に運ぶ。バナナの甘さと、ナッツの香りが、何とも言えずほっとした。

「……おいしい」
「でしょ？　よく来るんだ、ここ」

言って、河瀬さんは二口目。それからシュガーとミルクを入れたコーヒーを軽くすすった。

「話の途中で席を離れてごめんね。閉架書庫の事なんだけど」

言われ、姿勢を糺す。河瀬さんはコートの中にいつの間に入れていたのか、何枚かの書類をテーブルに出した。

「これが、書庫の手続きの仕方。検索の仕方はこっちだ。最初は迷うかもしれないけど、あの中を歩き回っていると、本当に色々な書物に出会えるから、これからも来てくれると嬉しいな」

渡された紙を見ながら、はあ、とうなずく。河瀬さんはこちらを見ながら、あ、と小さな声で呟く。

「興味なかった？　って聞いてから、全然答えをもらってないのに、てっきり興味があるんだと思い込んで話してたんだけど……違ったかな」

「……ち……」

紙をテーブルに戻してから、小さな声で違いますと言いかける。でも、それでさっきの懸念が頭の中をよぎった。

もし、ここで書庫への興味を否定して……いや、じつは全く無いわけでもないのだけど……そのまま、「じゃあどうしてこの図書館まで来ていたの？」って聞かれてしまったら……？

「……ち？」

「……ち……ち……」

怪訝そうに問いかける河瀬さんに、小さな、小さな声で答えた。

「ち……ちょっと……だけ……」

その途端、河瀬さんは嬉しそうに笑ってみせた。

「よかった！　あの書庫、本が好きな人にはたまらない場所なんだよ。またぜひ来てほしいな」

「……あ……」

その笑顔を見て、唐突に、雷に打たれたように感じる。

……好きだ、と、唐突に感じた。

この人の、この、楽しそうな笑顔が好き。
この人の、本を見る幸せそうな顔が、好き。
この人の、甘いものを嬉しそうに食べる顔が、好き。

フォークを手にとり、河瀬さんがマフィンを口に運ぶ。そしてばつが悪そうに、でも、とても嬉しそうに笑った。
私もマフィンを一口食べる。甘い香りが口の中に広がっていくのを感じながら、私はようやく、ぎこちなく、けれど正面から、河瀬さんの顔を見て、笑う事が出来た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3411z/

とある恋物語

2011年12月11日19時51分発行